

# 心奥探訪

〜一度諦めた夢を再び歩み出した女性が描く自分自身〜

2024年10月。

時折聞こえる秋の声、そんな音色に負けず劣らず軽やかな声で彼女はやってきた。

「よろしくお願ひします」

笑顔が印象的なその女性はこの10月に27歳を迎えたばかり。

それは同時に新たに夢に向かって歩み出したスタートでもあった。

出会った頃よりも自信とエネルギーに満ちた表情で彼女は語り出す。

彼女が諦めた夢とはなんなのか？

諦めた先で彼女が見た世界はなんだったのか？

そこには辛い過去と戦い続けた彼女の生き様と

諦めきれない純粹な想いが、織り重なる薄絹のように靡なびいていた。

三姉妹の長女として生を受けた彼女。

幼い頃は活発で、周りを巻き込むほどの元気な女の子だったという。

親が転勤族の仕事だったため、小学生で2回の転校を経験。

けれど彼女自身は新しく友達を作ることには抵抗はなかったという。

これまでの友達との別れに寂しくも感じつつ、新たな出会いへのワクワクも同時に感じていた。

「作り方がわからなくて」

高学年で転校した先で児童会の選挙に立候補。

しかし、来たばかりの彼女に対して歓迎する声ばかりではなかった。

そんな声は彼女の耳にも入ってくる。

聞かないふりをしながらも、少しずつ幼い頃のような活発さはなりをひそめていったという。

そんな学校生活の中、親の仕事での転校がなくなりそのまま中学へ進学。

彼女にとっては初めて3年以上身を置く環境となっていた。

けれどこの環境が彼女にとって大きな戸惑いだったという。

これまでは時期が来れば関係性が否応なくリセットされる、

そんな強制終了のある世界で生きてきた彼女にとってエンドレスに続く人間関係、

周りが変わらないという変化しない恐怖を感じていた。

周りの人間関係に何一つ不自由がなければ、そんなふうには思わなかったのかもしれない。けれど当時の彼女にとっては決して居心地が良いと即答できるものではなかった。

「役割を見つけたくて」

それでも彼女は自分の居場所を求め、中学でも生徒会に入り書記を務めていた。

特定のグループに属するわけでもなく、さながら一匹狼のような人間関係。

中学3年に上がり、進路のため外部から色々な職業の人が来るなか、

彼女の目に留まったのは女性の弁護士だった。

彼女の生き様や安心感を纏った雰囲気。

職業というよりもその人そのものに憧れたという。

そんな変わらない環境に抗う彼女へ追い打ちを掛けるように大きな傷を負う出来事が彼女を襲う。

彼女自身が当事者として事件に巻き込まれたのだ。

どうすればいいのかわからない状況の中、自力で弁護士とカウンセラーに相談したという彼女。

ここでの出逢いがこの後の彼女を大きく動かしていく。

「無知って怖いなって」

「知らないからこそ傷つくことがある。」

カウンセラーと弁護士という2つの職業に触れ、

彼女は知らないからこそ傷ついている人を救いたいと思うようになったという。

けれど現実はそのすぐには変わらない。

これまでの活発で活躍したい自分と誰とも触れ合わず閉じこもりたい自分。

自分の中での葛藤を抱えながら、

生徒会として自分の正義を貫くために無理やり明るく強がっていたという。

「自分のことでせいっぱいで」

高校に進学し、環境がある程度リセットされる期待もあったというが、

彼女の中ではずっと葛藤が続いていた。

そんな中選んだのは写真部と文芸部。

それはまるで2人の彼女がそれぞれ居心地のいい居場所を選んだかのようにだった。

そして彼女にとって大きな転機となるのが進路決めの一環で知った、裁判傍聴。

「こんな世界あるんだ」

元々法律や弁護士のような世界を漠然と考えていた彼女にとって大きな衝撃だったという。弁護士が相手に臆することなく意見をする姿を間近で感じ、

この裁判傍聴をきっかけに彼女は「法曹界」の魅力にはまっていく。

そして迎えた受験だったが、法学部は受からず彼女は一年浪人することとなった。

焦りや不安のある中、法律の勉強をしたい彼女にとって受かるための勉強は苦しかったと語っている。

周りとは一年遅れで大学に入学。

法律の勉強と並行して、学生で祭りを作るという学生団体の広報部へ入った彼女。

「今思えば、よくやってたなあ」

好奇心に突き動かされ、一緒にいる人たちにも恵まれ、多忙な毎日を過ごしていたという。

大学3回生、学生団体も卒業し緊張の糸が切れたのだろう。

精神的に落ちてしまったという。

多忙な中でも時折、起こっていた心の異常。

まだあの日の傷が癒えていない中で走ってきた彼女が、この時初めて母に打ち明けたという。

言ってしまったという後悔と同時に少しだけ心が軽くなった彼女。

そんな自分自身と向き合いながら彼女は大学院へ進む。

「なりたいイメージ像がわからなくなってきて」

大学院に進んだ彼女だったが、周りからのダメ出しや熱量の差など、これまでの好奇心だけではない現実を突きつけられたことで休学を決意したという。

2年の休学中、弁護士ではなく研究の道に行こうとしたという彼女。

しかしあまり乗り気になれなかったことに加え、

修復的司法という加害者と被害者を対面させる手法に、

当時の自分が恐怖を感じ、出来ないと思ったという。

このことがきっかけとなり当時のことを強く思い出してしまった彼女。

落ち着かない状況の中、今年の一月、彼女は退学を決意し夢を諦めた。

諦めた彼女は司法書士事務所の事務に就職。

法律という世界に関わりつつ、司法書士や行政書士なども勉強してみたという。

諦めてから見る世界。

法律という自分自身が好きだと感じた世界。

触れれば触れるほど、違うものを学べば学ぶほど、

彼女の違和感は日に日に大きく膨れ上がっていったという。

彼女にとって法律とは「社会と繋がり、社会を知るツール」であると語っている。  
そんな彼女にとって社会との繋がりである世界。

「好きを諦めきれなかった」

少し照れくさそうに彼女は話す。

あの日、見失った自分のなりたいたい姿。

今は法律の知識と傷ついた人へ寄り添う癒し手となる弁護士へ。

「ここが心地いいって感じちゃったから、私は今も進んでいる」

そう話しながら再度、弁護士になるために彼女は歩み出す。

周りを巻き込むほどの活発な彼女と大人しく穏やかで優しい彼女。

その二人が手を取り合い、同じ夢に向かって

弱気を助け強さをくじく、幼い頃に見た憧れの姿を

その瞳に映し出しながら